

*Policy Topics*

## 神戸市廃棄物行政私史<sup>1</sup> My Experience of Waste Administration in Kobe Municipal Office

北尾 進<sup>2</sup>  
Susumu Kitao

はじめに

「循環型社会形成推進基本法」等の法整備が進み、自治体、企業、市民においても様々な取組が進められている。しかし、「生産」、「流通」、「販売」、「消費」、「廃棄」の各段階において有効な政策が実施されているだろうか。「ごみ問題」の原因が「大量生産・消費システム」であるなら、これを抜本的に変えなければならない。しかし、これを進めようとするなら大きな抵抗があるため抵抗の少ない範囲の中での取組に留まっているのではないか。

私は、永年にわたり神戸市で環境・廃棄物に関する仕事に従事し、阪神・淡路大震災も体験した。これらの経験のいくつかを述べ、あわせて「ごみ問題」の解決に何が最も必要かを述べてみたい。

### 1. 1967年、神戸市清掃局に

私が、廃棄物とかかわることになったのは1967年4月に神戸市清掃局長田清掃事務所勤務することになったときから。

その頃の清掃事務所では作業手長という現場監督が実権を握っていて非近代的な職場支配がなされていた。暴力沙汰もしばしばで流血の惨事もあった。私も「若いくせに生意気だ！」と2度ほど暴力を振るわれた。

作業手長以下の作業担当者は、「現業職」。管理職や指導職員、事務担当は「行政職」で給料表も労働組合も別々。作業員の採用も、現場の実力者が「紹介者」となり、その力で採用されるということもあるとか。

また、清掃作業についての社会一般の差別は当たり前とも言える状況だった。作業員がいる前で、お母さんがそのこどもに向かって「あんたも勉強せんかったら、あんなおっちゃんみたになるで！」と。作業員の中には自分の仕事を子供には言えない人もいた。

「清掃差別」という職業差別が部落差別とも重なっていた。

とにかく理屈が通用するところではなく、義理と人情の世界、親分・子分の世界。私が抱いていた神戸市役所のイメージとは程遠いもので、「ここは市役所だと思っはイケナイ。」と自分に言い聞かせていた。

### 2. 「ごみが増えてきた」…燃やして 埋める

経済成長とともに廃棄物も次第に増え、神戸市は廃棄物処理施設建設に追われる。

神戸市は長尾山埋立処分地が満杯に近づき1972年5月「ごみ非常事態宣言」をする。そして新しく西区に布施畑処分地をオープンさせた。この布施畑処分地は、当時「東洋一」の規模。また、ごみ焼却施設については「1区1工場」の方針を掲げごみ焼却工場の建設を進める。「施設主義」でごみ問題の解決を図ろうとしていた。ごみの減量やりサイクルというような考えはまだまだなかった。

<sup>1</sup> 本稿は2010年11月18日(木)に行われた総合政策学部講演会の内容をまとめたものである。講演時のタイトルは「神戸市廃棄物行政私史」であった。

<sup>2</sup> 神戸市シルバーカレッジ生活環境コースコーディネーター、元神戸市環境局東灘事業所所長

「須磨ニュータウン」の人口が増えてくる中で、この地域でのごみ焼却施設の建設が急務となった。建設予定地は、地下鉄「名谷駅」駅前。

ここは、ニュータウンの中心で、「すり鉢の底」、煙突から出る排ガスが住宅地を直撃すると、近隣の白川台地区の住民を中心に建設反対運動が展開された。この反対運動のリーダーの1人が故香嶋正忠氏。当時中学校の教師。その後香嶋氏が「神戸ごみ問題連絡協議会」をつくり、ごみやリサイクルの運動を進めた。この「会」の学習会講師の派遣を神戸市に依頼してきた。上司から「北尾君、行ってくれるか」と言われ、私は「いいですよ」と講師を引き受けた。これ以来、香嶋氏とのお付き合いが続いた。

今は亡き香嶋氏は神戸では数少ない熱心なごみ活動家だった。惜しまれる。

### 3. 縦割り行政に苦勞

市民から公園でガレージセールをしたいと申し出があり、公園管理の係に承諾をもらいたいと話をしたが、担当係長は公園の目的には合わないと言いつつ頑固に拒否。

また地域福祉センターで牛乳パック回収活動をしようと、担当している保健福祉局に行くと、またもや「タテワリ」。「地域福祉センターは、福祉活動をするところであり、ごみを置くところではない」と抵抗。でも粘って粘って前に動かした。1993年のこと。

### 4. 労働組合が…

生ごみの減量をと思い、「生ごみ堆肥化容器購入助成制度」を考えていた。丁度そのとき、落合クリーンセンター建設に反対をしていた香嶋さんが、この制度を実施するようにと市議会に陳情。この助成制度を実施

することになる。従業員労働組合は「そんなことをしたらごみが無くなり、わたらの仕事がなくなる！」と猛反発。でもこの制度は啓発的なものでごみが無くなってしまふことはないと言われ説明を続けて実施した。

### 5. 今度は、ごみ収集業者が…

1994年度から「大規模事業所ごみ減量指導制度」を実施している。これは、学校やオフィスなどの大規模建築物を指定し、そこで発生するごみ量やごみ減量の取組実績の報告を求め、これに基づきごみ減量指導をするというもの。

この説明をごみ収集業者の組合に説明に出かけると、「北尾！リサイクル、リサイクルと言うな！ごみのことはワシラに任せとけ！」と。ごみが減れば、彼らの収入が減ることになる。

### 6. もう一つの業者から…

駅前などに放置されている自転車は、一定期間告知した後、道路管理者である神戸市建設局が撤去し保管、そして保管期限が過ぎたものを「不用品売却」として一般競争入札を経て業者に売却。業者の多くはこれらを途上国へ輸出。

この放置自転車の一部を環境局が手に入れ、これを高齢者が修理して環境イベント会場などで販売しようと考えた。

ところが、業者からは、「環境局が中古自転車をピンハネするのはケシカラン。わたらの仕事を奪うのか」と。でも話し合いを重ね、環境局の取り分に制限を加える形で何とか実施した。

### 7. 「おとうちゃん 学校の先生や！」

1994年からはじめた環境教育「ふれあいご

## S. Kitao, My Experience of Waste Administration in Kobe Municipal Office

みスクール」は、小学校にごみ収集車両とごみをもって行き、ごみやりサイクルについてごみ収集作業職員が先生となってお話をするという取組。

でも人前で話すのは苦手。

「昨日、家で喋る練習をしたんや、そしてら子どもに『お父ちゃんポケットに手をいれたままではアカンで』と言われた、さっぱりや アハハ」と、なんだかうれしくなる。こどもの環境教育だけとお父ちゃんの教育にもなってるンヤ！

#### 8. トイレもライフライン！！

ゴオー！グラッ！グッシャ！1995年1月17日、直下型地震が神戸を襲う。我が家も半壊。電車はダメ、バスもダメ、自転車で朝霧の自宅から三宮の市役所へ。そして、「北尾くん、仮設トイレの方に行ってくれ」と。震災で避難所のトイレは水が出ないため使用不能、でも使う、大変な状態。

全国から仮設トイレがドンドン届けられる。「ありがたい！」。これを受け入れ、避難所に設置、汲み取りの手配、というのが仕事。でも街は、どこもかしこも大渋滞。作業は渋滞の少ない早朝。仮設トイレを避難所に届けると拍手で歓迎されて少しウルッ。

3,000基を設置。寒い時期、お年寄りや避難所でトイレに行くのを遠慮して水分を取るのを控えることも。仮設トイレは屋外、寒くて大変、健康が心配だ。

人間がいると、ごみも出るしウンチも出る。トイレも絶対になくってはならないもの。

「トイレもライフラインや！」

#### 9. 「役所が前に出たらアカン！」

2001年、地域での環境教育を実践し、環

境に配慮したライフスタイルを身に付けた市民や環境に配慮したビジネススタイルを身につけた事業者たちが地域で自主的にエコ活動を進めるまち「エコタウン」づくりをしようという取組をはじめた。

しかし私は、モデル実施に入ろうとするときに転勤。残念。

その後、エコタウンは、数を増やすことに重点が移ったのか「助成金」を出すようになった。また、どうしても役所が進める活動になり、市民は役所から言ってくるし、お金も出るから・・・という感じになった。

私が当初描いていた、市民が主体となって、役所が言うからでなく地域で主体的に環境教育を柱にしたエコ活動が進められるまちづくりを確実に進めるということが忘れ去られてしまい誠に残念。

#### 10. 「地域力」・「市民力」が大切！

以上、私が経験したことのいくつかを述べたが、経験から「ごみ問題」の解決に最も必要なのは、「地域力」・「市民力」だと思っている。

「容器包装リサイクル法」などの法整備がなされ、自治体も「分別収集」や「ごみ有料化」を進めている。しかし「ごみ問題」は本当に解決の方向に向かっているのだろうか？

やはり拡大生産者責任(EPR)をしっかりと位置づけた生産段階での取組が不可欠だろう。この困難な課題に立ち向かってこそ「ごみ問題」は解決へと向かう。これを進める力こそ、学習・経験を積み重ねた地域・市民の力であると考え。阪神・淡路大震災の経験で私たちはそのことを学んだ。

「エコなまちづくり」は、「安心・安全まちづくり」にもつながる。

